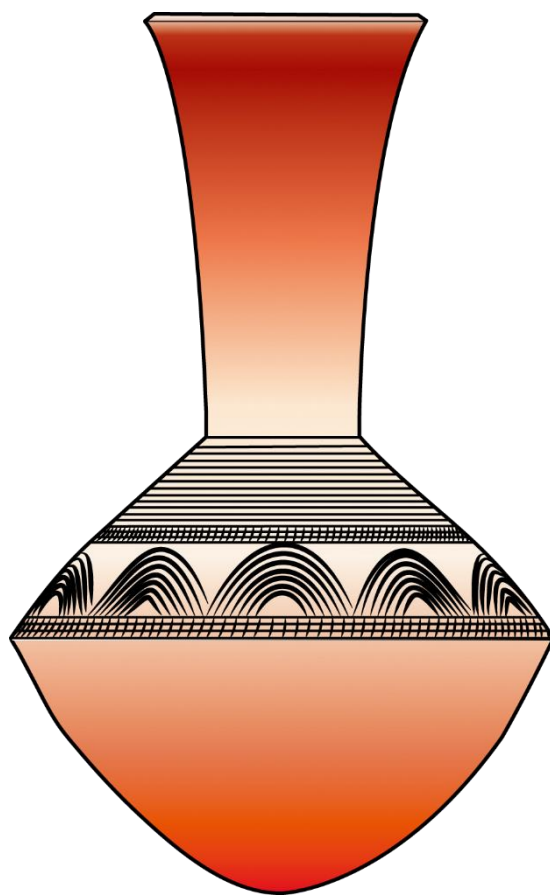


# 本目遺跡のあゆみ

—本目遺跡発掘調査 25 周年記念誌—



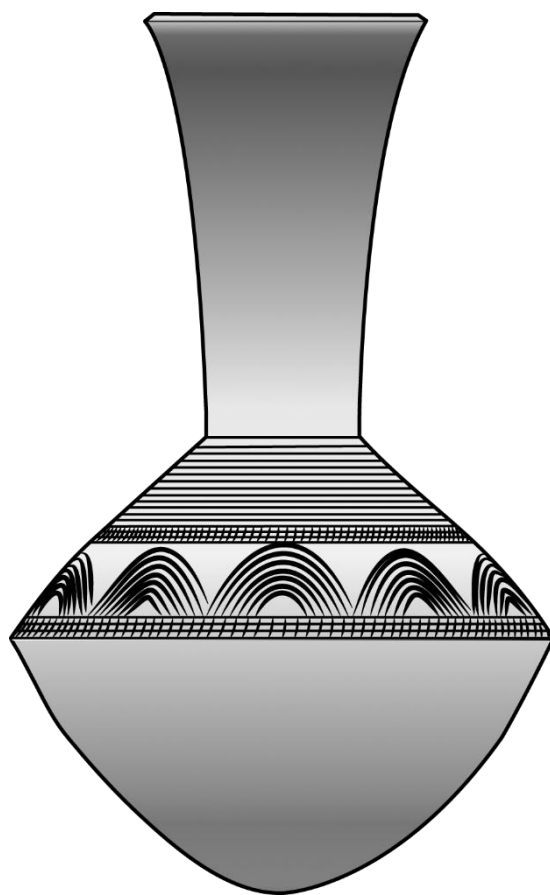
あさぎり町教育委員会

2022（令和4）年3月



# 本目遺跡のあゆみ

—本目遺跡発掘調査 25 周年記念誌—



あさぎり町教育委員会

2022（令和4）年3月





## 序

あさぎり町免田所在の本目遺跡は、1994（平成6）年から1995（平成7）年にかけて発掘調査が行われ、1996（平成8）年には免田町指定史跡の指定を受け、町村合併後は、あさぎり町指定史跡として今にいたっています。

その後、本遺跡の理解を深めるイベントが節目ごとに開催され、2020（令和2）年度に発掘調査の終了から25周年を迎えたことを記念し、このたび「発掘調査25周年記念誌」を刊行する運びとなりました。

本書は、研究者を含めた町内外の関係各位が、本遺跡のもつ価値を常に磨き続けてきた記録であり、地元住民との交流のなかで遺跡のある景観を生かし、これからの地域社会のあるべき姿を模索してきた努力の結晶といえます。

「遺跡は地域に勇気を与える」。本目遺跡発掘のきっかけを作られた考古学者・森浩一先生の名言をかみしめ、本遺跡の保存活用と、これからのまちづくりを考える一助として、本書が多くの皆様に読み継がれていくことを期待します。

2022（令和4）年3月

あさぎり町教育委員会  
教育長 米良 隆夫

### 例 言

- 1、本書は、本目遺跡の発掘調査 25 周年記念誌です。
- 2、本目遺跡は、熊本県球磨郡あさぎり町大字免田字下乙に所在します。
- 3、本目遺跡の調査は、1994年3月（第1次）、1994年7・8月（第2次）、1994年12月（第3次）、1995年2・3月（第4次）、1995年7・8月（第5次）に実施され、1996年11月、墳丘墓とその周辺地区（第3～5次調査）の保存が決定し、1996年11月に町指定史跡となっています。
- 4、執筆分担については文中に示し、執筆者の所属等については本書の報告書抄録に掲載しています。
- 5、本書に掲載したイラスト・写真図版等はあさぎり町教育委員会が所蔵しています。多くの方にご活用いただければ幸いです。
- 6、本書の編集は、佐古和枝氏（関西外国語大学教授）をはじめ発掘調査団のメンバーで構成する本目遺跡研究会のご協力を得て、あさぎり町教育委員会事務局（秋元）がおこないました。



## 目 次

### 第1章 あさぎり町と球磨の魅力

- 1 あさぎり町の地勢と文化遺産・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 球磨の考古学史と本目遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 3 「クマソ復権」はじまる・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

### 第2章 本目遺跡の調査と研究

- 1 本目遺跡をめぐって・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 2 本目遺跡の発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 3 免田式土器が語るもの・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 4 地下式板石積石室墓について・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 5 南島からみつめる免田式土器・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 6 あさぎり町に期待する事・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

### 第3章 本目遺跡は、みんなの宝～市民参加の保存・活用

- 1 遺跡を活かしたまちづくり・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- 2 20周年記念シンポジウムの記録・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
- 3 25周年によせてのメッセージ
  - ・発掘調査の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
  - ・免田町職員として経験した本目遺跡の発掘調査・・・ 26
  - ・遺跡から学んだこと、伝えたいこと・・・・・・・・ 27

むすびにかえて・・・・・・・・・・・・・・・・ 29



# 第1章 あさぎり町と球磨の魅力

## 1 あさぎり町の地勢と文化遺産

あさぎり町は、熊本県の南部、球磨盆地の中央に位置し、南は宮崎県えびの市と小林市に接している。球磨盆地の中央部分を縦割りにするかたちで町の北側と南側が山地になっており、両側の山地から流れ込む球磨川の支流に沿ったかたちで緩やかな平地を形成している。その気候は比較的温暖多雨であるが、盆地特有の内陸的気候となっており、年間を通じて霧の発生が多い地域でもある。2003（平成15）年に上村、免田町、岡原村、須恵村、深田村の5町村が合併して誕生したあさぎり町には、それぞれの旧町村の自然や歴史に根付いた、美しい風景や特色ある文化、そして多様な文化財がある。

あさぎり町の四季を彩る風景として、春に咲く町花リュウキンカ、秋の上村城址（麓城跡）に広がる紅葉、冬の白髪岳に輝く樹氷等があげられるが、夏に広がる田園風景はあさぎり町だけでなく人吉球磨地域を象徴する景色だといえる。人吉球磨は熊本県内でも有数の米どころであり、その米を主原料として450年以上前より醸造されている球磨焼酎は、人吉球磨地域を代表する一つの文化として、古くより人々から愛されてきた歴史がある。

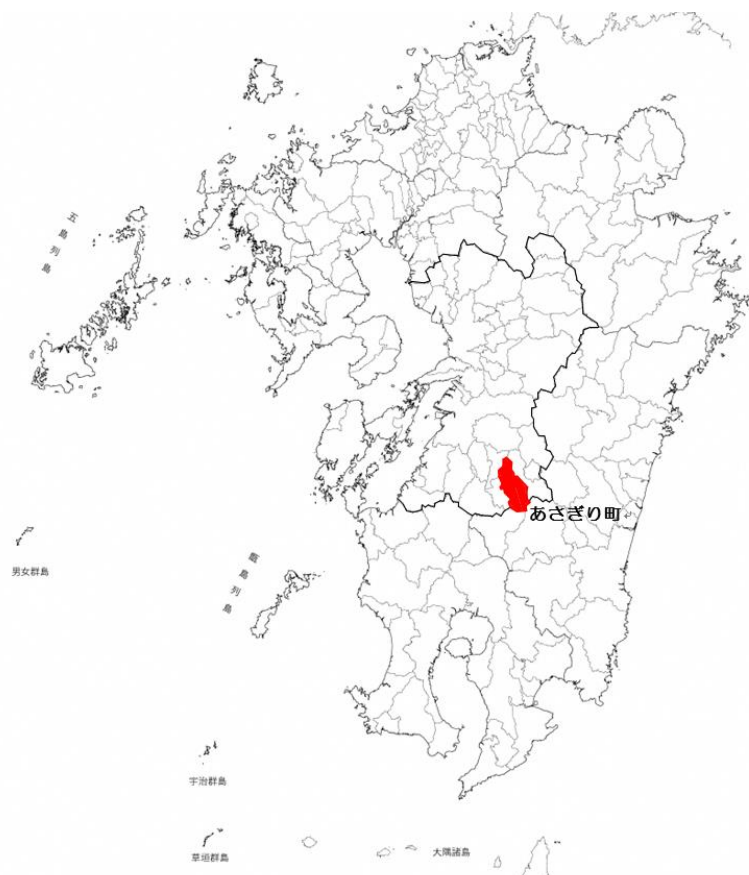


図1 あさぎり町地図

あさぎり町の文化財の特色としてまず挙げられるのは、中世から近世にかけての仏像、建造物が多くみられるということである。人吉球磨地域は、盆地という地の利を活かし、相良氏が鎌倉時代から700年にわたり統治した地域であり、その長い歴史のなかで生まれた特色ある文化財は、2015（平成27）年に、「相良700年が生んだ保守と進取の文化～日本でもっとも豊かな隠れ里一人吉球磨～」として日本遺産の認定を受けている。人吉球磨の各市町村にはそれぞれ日本遺産を構成する文化財があり、あさぎり町には谷水薬師堂（町指定有形文化財／上）や、国指定重要文化財「木造毘沙門天立像・木造二天王立像」を安置する勝福寺仁王門（荒茂毘沙門堂）（町指定有形文化財／深田）がある。また、阿蘇釈迦堂（須恵）に安置される「木造二天王立像」は2020（令和2）年3月に熊本県指定重要文化財に指定された。

また、古代の遺跡やその出土遺物の貴重さ、豊富さも特色の一つである。本記念誌の主題であり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡である本目遺跡（町指定史跡／免田）からは、免田式土器や後漢の方格規矩四神鏡の破鏡が出土しており、墳丘墓や南九州の在地墓制である地下式板石積石室墓が遺構として検出されている。古墳時代後期に築造された才園古墳群（県指定史跡／免田）の2号墳からは、鍔金獸帯鏡をはじめとする豊富な副葬品が出土しており、それらは国指定重要文化財に指定されている。鍔金獸帯鏡は古代中国で鑄造されたとされる鍔金鏡であり、鍔金鏡は国内では才園古墳2号墳の他に、一貴山銚子塚古墳（国指定史跡／福岡県糸島市）と城塚古墳（国指定史跡／岐阜県揖斐郡大野町）でしか出土しておらず、国内での出土は非常に少ない。また8セット出土している馬具には、朝鮮半島からの輸入品だと考えられる表面を金や銀で覆ったものや、材料として南海産のイモガイが使用されているものもある。このような副葬品の出土を踏まえると、この才園古墳2号墳の被葬者は中国大陸や朝鮮半島ともつながりをもつ有力豪族であった可能性が高いと考えられる。（秋元めい）

表1 あさぎり町の主な文化財

指定区分	種別	名称	地区
国	重要文化財（彫刻）	木造毘沙門天立像・木造二天王立像	深田
国	重要文化財（考古）	肥後国球磨郡免田才園古墳出土品	免田
県	重要文化財（建造物）	宮原観音堂（厨子共）	岡原
県	重要文化財（彫刻）	木造釈迦三尊坐像 / 木造二天王立像	須恵
県	史跡	才園古墳群	免田
町	有形文化財（建造物）	谷水薬師尊堂一棟並びに仁王門一棟	上
町	史跡	本目遺跡	免田

## 2 球磨の考古学史と本目遺跡―「クマソ復権」までの長い道程―

**球磨の考古学の幕開け** 「球磨の考古学史の起点は？」と問われれば、新堀甚八が木上村（現・球磨郡錦町木上）岩立の城ヶ峰で石窟を発見した1888（明治21）年8月22日と答えるだろう。錦町の城ヶ峰横穴墓群の発見だ。さらに興味深いのは、この事例を取り巻く三人の人物のことだった。

一人は、「古代武器」、「再度古代武器ノ由来ヲ説テ坪井正五郎君ノ質疑ニ答フ」（闡幽舎主人1888a、b）と題して、石窟と「実ニ近頃珍敷古器物」を報告した闡幽舎主人。もう一人は、「闡幽舎主人ノ古代武器考ニ付キテ」（坪井1888）で、闡幽舎主人の解釈を痛烈に批判した坪井正五郎。さらにもう一人は、「古代武器」を読み、「球磨川を界とし人吉以南に同一なる日本人種の古墳遺物存在せるや否や」（寺石1889）と、球磨を訪問した寺石正路。

こうして始まった球磨の考古学は、1917（大正6）年5月末に新たな局面に入った。下林繁夫が大村横穴群で装飾文様を発見し、それに呼応した角田政治も30日に新たな文様を発見したのだ。その中で発した角田のコメントが実に興味深く、象徴的だ。

古来熊襲系統に属する球磨に大和民族の古墳なしとせられたる学者の説を打消し球磨にも大和

民族の住居せし事を説明する考古学上の大発見

**本目遺跡の「学界登場」前夜** その新局面に相応しい象徴物が、その1か月後に見つかった本目遺跡の「土器」だろう。1916（大正5）年7月8日、東京帝国大学の柴田常恵は、「石器時代と人種について」と題して熊本市で講演した。その記録に興味深い行があった（九州日日新聞社1916）。

今度球磨から発掘された土器が弥生式で嘗て日向の小林から出た土器と同一

「今度球磨から発掘された土器」とは、『世界美術全集』掲載の「東京帝国大学人類学教室蔵」「135 弥生式土器」。解説には、「熊本県球磨郡免田村発見、柴田常恵氏によれば畠の中に古墳遺物や石斧等と混在してゐたといふ」（後藤1930）とあり、明らかに重弧文土器だ（図2左）。

「日向の小林から出た土器」とは、『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第三冊』（濱田・島田・梅原1919）

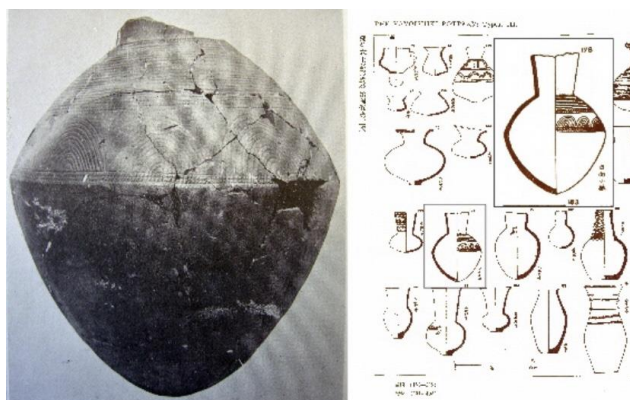


図2 『世界美術全集』（左）と「日向小林」（右）の重弧文土器

の巻末「弥生式土器形式分類図録」の、「日向小林」と添えられた土器のこと。見ると、重弧文土器だった（図2右）。

これら二つを関連付ければ、「今度球磨から発掘された土器」が重弧文土器だったことは明らかである。「大正七年、免田町字本目の乙三一六七番地、通称ゲンカ屋敷」で出土した（乙益 1986）とか、「大正何年でしたか、柴田常恵東大教授がどういふことで分かりませんが、開田中のここを通」った際に「一個を持って帰られました」（高田 1986）とか、柴田の本目遺跡訪問の年が 1918（大正 7）年とされてきたが、本当のところは 2 年前の 1916（大正 5）年だったことになる。

**本目遺跡「学界登場」** 「本目の弥生式遺跡」と本目の名称が初めて登場したのは、1937（昭和 12）年だろう。それは、「肥後国免田町本目出土の弥生式土器」（高田・乙益 1937）で、その切っ掛けとなったのは、同年 3 月の開墾だった。

高田素次と乙益重隆は、共同で発掘。地面下 60 cm にあった、厚さ 90 cm の黒土の層に包含されていたこと、「竪穴式の石槨古墳の周囲」に何か所かにまとまっていたことを確認した。

高田の愛弟子、井上猪一郎も本目遺跡に係わっていた。それは、外面に「昭和卅三年八月十二日免田町下乙本目」と墨書された重弧文土器（図 3）から分かったこと。満 18 歳の誕生日直前の 1953（昭和 28）年 12 月 17 日に白血病で夭折した考古ボーイが、免田中学校 1 年生の夏に、この土器を採集していた。

**「クマソ復権」始動と今** 1990（平成 2）年、免田町は、役場職員の山口和幸が中心となって、「クマソ復権」の運動を企画した。かつて「日本人種の古墳遺物存在せるや否や」や「古来熊襲系統に属する球磨に大和民族の古墳なしとせられたる学者の説を打消し」た先人達とは違った趣きの「クマソ」だった。それは、本目遺跡の重弧文土器が「東京帝国大学人類学教室蔵」となってからの 74 年目のことで、今年はその 105 年目にも当たっている。

その間、輝きを失わなかった遺跡の魅力とは、一体どこにあるのだろう。

（木崎康弘）

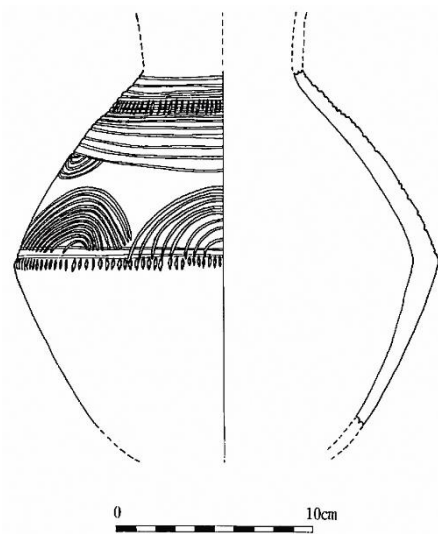


図 3 井上猪一郎採集土器



### 3 「クマソ復権」はじまる

8世紀初めに完成した『古事記』と『日本書紀』（以下、記紀と略す）には、ヤマト王権による各地の征服伝承が記載されている。その代表例が、東のエミシ（蝦夷）と南九州のクマソ（熊襲）だろう。記紀によれば、景行天皇やその皇子ヤマトタケル、仲哀天皇が南九州に住むクマソを「まつろわぬ乱暴者」として「征伐した」（仲哀天皇は未遂）という。

戦前までは、国家主導の皇国史観のもと、記紀の神話伝承をすべて“事実”とみなす歴史教育がおこなわれた。話は前後するが、「クマソ復権」を始めた頃、旧免田町で「わしらは、小学生の頃に先生から“お前らの祖先はクマソっちゅうて、天皇に逆らったけしからんやつらじゃった”と言われたが、本当か？」と聞かれたことがある。「そんなこと、ありませんよ！」と言えるのが、考古学である。だから、考古学で「クマソ復権」なのである。

記紀は、どちらも天武天皇が編纂に関わったとされている。どこの国でもいつの時代でも、およそ支配者側が作った記録は、支配者に都合のよいように書かれるものである。それに対して、考古学は、過去にそこで暮らした人々が残したモノを土の中から掘り起こし、当時の人々の暮らしぶりを復元する。発掘された考古資料は、中央史観の歴史書には書かれない、地域文化の豊かさを伝えてくれる。そして、記録のなかのウソもあぶりだす。「文字は侵略の言い訳を書き残す」というアイルランドの考古学者の言葉は、記紀にもあてはまる。

とはいえ考古学界も、かつてはヤマト中心史観が根強かった。1970年代の終わり、私の恩師森浩一同志社大学教授は、ヤマト中心とは異なる「日本海文化圏」を提唱した。今では当たり前の視点だが、当時は強烈に批判された。その後、森先生の関心は、地域文化の掘り起こしに向けられた。80年代には富山市で、森先生を中心に「日本海文化シンポジウム」が10年間続いた。地方都市が本格的な学術シンポを主催した先駆的な事例だろう。

1988年2月、某大手酒造会社の社長が「東北はクマソの産地。文化的程度も極めて低い」と発言し、不買運動へと発展した。エミシとクマソを間違えるお粗末な歴史認識も露呈した。ちょうどその年、森先生は週刊グラフ誌「アサヒグラフ」の連載「交錯の日本史」で、列島各地の地域文化の再評価をしており、12月9日号の「クマソの鍔金鏡」で、免田町の鍔金鏡や免田式土器が示す洗練された文化は、記紀が描くクマソ像とは食い違うことを指摘した（森 1990）。翌 89 年には佐賀県吉野ヶ里遺跡が注目を集め、森先生の名言「考古学は地域に勇気を与える学問」が生まれた。そして 90 年、「クマソの鍔金鏡」を読んだ免田町役場の山口和幸さんが森先生を口説き、「クマソ復権」の町おこしをすることになった。考古学が免田町に勇気を与えたのである。本目遺跡の発掘調査も、その一環としておこなわれた。

考古学は地域に勇気を与えるが、「そのためには考古学者には学問的勇気がある」という続の一文がある（森 1991）。「クマソ復権」は、私達に学問的勇気が足りているかを問う、師からの大きな置き土産である。 （佐古和枝）

## 第2章 本目遺跡の調査と研究

### 1 本目遺跡をめぐる

球磨郡の考古学研究において、本目遺跡が重要な意味をもつことを、前章で木崎康弘さんが詳細に説明してくださった。その長い道のりの重みを改めて感じながら小稿を書いている。

私たちがおこなった5次にわたる発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期までの土壙墓 41 基・木棺墓 16 基・墳丘墓 1・壺棺 1・小土坑 11・地下式板石積石室墓 2 基と、免田式土器を特徴づける重弧文長頸壺を含む多数の土器、墓に副葬された破鏡 1、管玉 1、ガラス小玉 18、鉄剣 1、鉄鏃 16 がみつかった。

発掘に参加した河森一浩は出土した免田式土器の編年を、松田度が地下式板石積石室墓の分析を、そして松原信之と 15 周年事業から参加した石堂和博が南島における免田式土器を検討して、それなりの学問的な成果に繋がったと思う。さらに、本章の最後で宮崎敬士さんが本目遺跡と球磨盆地の学問的な意義付けや課題を、多角的に描き出してくださった。

ご指摘の通り、球磨盆地はおもしろい。山深い九州山地の南端にポッカリ開けた小宇宙、とはいえ周囲と隔絶した世界などではなく、北部九州を特徴づける貴重な青銅器、本目遺跡の破鏡や玉類などが、おそらく西の有明海の方から入ってくる。土器をみれば、東部九州や瀬戸内地方の影響が見てとれる。日向地方に特徴的な花卉型間仕切住居もある。古墳時代の地下式板石積石室墓は、西南九州に特徴的な墓のスタイルだ。西からも東からも南からも、人々が活発に往来するターミナルのようである。

けれども、そうした外来の文化要素は、球磨盆地のなかで少しずつ変容する。熊本平野では重弧文長頸壺は圧倒的に集落遺跡での出土例が多いのだが、球磨盆地では墓への供献例が増える。北部九州では集落からの出土が多い破鏡も、本目遺跡では墓に伴って出土した。墳丘頂部に象徴的に重弧文長頸壺を置く墳丘墓は、墳裾周辺に供献土器を置く浅い小土坑が点在するのが特徴だ。墳丘墓の周辺に、かつては「同じような土饅頭があちこちあった」と聞く。墳丘墓の近くには、かつて重弧文長頸壺が多数出土した「共同墓地」があるのだが、そこも土壇状の高まりだったという。本目遺跡の墳丘墓も、当初は北部九州的なものと考えたが、球磨特有の埋葬文化かもしれないと思い始めている。そうした個性が古墳時代により顕在化して、ヤマトから「クマソ」と呼ばれる独自の世界を構築したのではなかろうか。

「球磨特有」といっても簡単ではない。同じ町内で重弧文長頸壺を多数出土したことで知られる市房隠れ遺跡は小型の箱式石棺群であり、支石墓の一種という見方もある。僅かに遅れて造墓活動が盛んになる本目遺跡は、土壙墓・木棺墓群、そして墳丘墓がある。これをどう説明すればいいのか。宮崎さんが仰るように、同時期の球磨盆地、さらに宮崎県や鹿児島県の墓と「ならべてくらべて」するための資料の増加を俟っている。 (佐古和枝)

## 2 本目遺跡の発掘調査

免田町において「クマソ復権」の気運が高まる中、1994（平成6）年2月、免田町内の埋蔵文化財の調査・発掘や、その保存・活用を目的として「免田町遺跡調査会」が発足した。同年3月には考古学・歴史学の基礎資料の作成を目的として、免田町教育委員会および免田町遺跡調査会が調査母体となり、本目遺跡の発掘調査が実施された（表2）。

第1・2次調査では、1918（大正7）年の地下げ工事中に多量の土器が出土し遺跡発見の端緒となった「源ヶ屋敷」の南側や、1937（昭和12）年に多量の土器が出土し「免田式土器」設定の基準資料となった「共同墓地」の南側に調査区を設定した（図4）。また、遺跡の範囲や土層の把握を目的として、10ヶ所の試掘坑（2×2m）を設定した。

圃場整備によって水田化された地点では遺物包含層や遺構面は削平されていたが、現在、集落が立地する扇状地の高位部では、アカホヤ火山灰や遺構面である暗褐色土の堆積がみられ、上部には遺物包含層が確認された。特に、第1・2・5トレンチでは土壇墓や木棺墓が検出され、「免田式土器」の指標となる重弧文土器を含む土器群が、墓壇の上部に供献された形で出土した。弥生時代後期から終末期を主体とするが、第5トレンチでは鉄鏃を副葬した割竹形木棺が検出され、本目遺跡が古墳時代初頭まで継続したことが明確となった。

この調査では集落域の把握にはいたらなかったが、①「源ヶ屋敷」周辺に墓域が展開し、弥生時代後期から古墳時代初頭に位置づけられること。②土壇墓、木棺墓の上部に土器の供献がみられること。③墓壇の供献土器が「免田式土器」の指標となる重弧文土器や高杯、器台、小型壺などで構成されること。などが明らかとなった。「免田式土器」の標識遺跡である本目遺跡において、重弧文土器が遺構に伴って検出された意義は大きい。

こうした中、1994（平成6）年11月、「共同墓地」の南側で宅地造成工事が行われ、重弧文土器を含む多量の土器が出土した（図5）。免田町教育委員会の連絡を受け、佐古和枝（関西外国語大学助教授）、河森一浩（同志社大学3回生）は急遽現場確認を行い、同年12月10日より免田町遺跡調査会が免田町教育委員会の委託を受け緊急調査を行った（第3次調査）（表2）。その後、宅地造成工事計画地の全域に調査区を広げ第4・5次調査を行った（表2）。

調査区全域にわたり、弥生時代後期から古墳時代前期の土壇墓、木棺墓、地下式板石積石室墓が検出され、「免田式土器」設定の端緒となった「共同墓地」の周辺にも墓域が広がることが明らかとなった（図5）。その調査成果を要約すると、以下のようになる。

- (1) A地区において墳丘と考えられる高まりが認められ、本目遺跡の墓域の中でも重要な地点と考えられる。
- (2) 墳丘の下層、上層において土壇墓、木棺墓が検出され、墓壇の上部からは重弧文土器を含む土器群が供献された形で出土した。その層位的な関係は、重弧文土器を含む土

器群の編年の基準を提供した。

- (3) E地区の東端で木棺墓が検出され鉄鏃の副葬がみられた(SK23ほか)。重弧文土器は出土せず、墓壙の上部からは小型壺が供献された形で出土した(SK24)。重弧文土器の終焉時期を示す資料と考えられる。
- (4) C地区において2基の地下式板石積石室墓が検出され、多数の鉄鏃が副葬されていた(SK17・18)。南九州における墓制の変遷を考える上で注目される。

以上の調査成果に基づいて、本目I期(弥生時代後期前半)から本目IV期(弥生時代終末期から古墳時代初頭)が設定され「免田式土器」の標識遺跡の変遷が明らかとなった。人吉盆地を中心とした熊本県南部の編年軸を確立するとともに、他地域との交流を示す土器の存在から、熊本県北部や宮崎平野、鹿児島県との併行関係を考える資料を提供したと考える。(河森一浩)

表2 本目遺跡の発掘調査一覧

	調査期間	調査地点	調査面積
第1次調査	1994(平成6)年3月15日~3月30日	第1~3トレンチ 免田町乙3155番地ほか	143.5㎡
第2次調査	1994(平成6)年7月25日~8月25日	第4・5トレンチ 免田町乙3143番地ほか	184.75㎡
第3次調査	1994(平成6)年12月10日~12月28日	第6トレンチ(A地区) 免田町乙3133番地ほか	942.23㎡
第4次調査	1995(平成7)年2月6日~3月25日	第6トレンチ(A~C地区) 免田町乙3133番地ほか	
第5次調査	1995(平成7)年7月21日~8月31日	第6トレンチ(A~E地区) 免田町乙3133番地ほか	

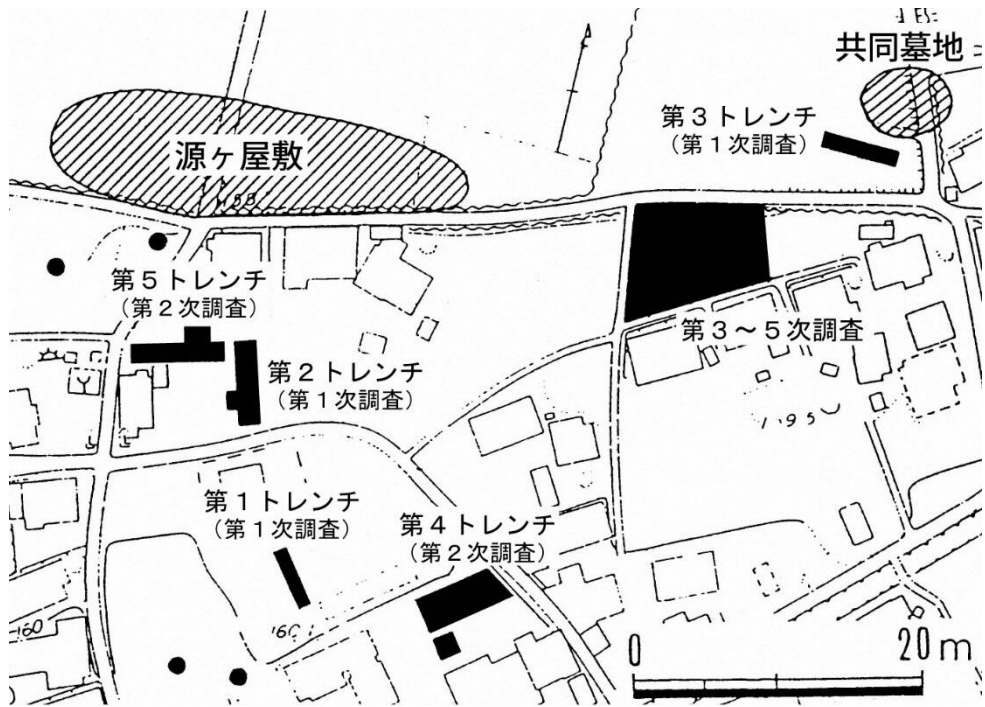


図4 本目遺跡の調査区配置

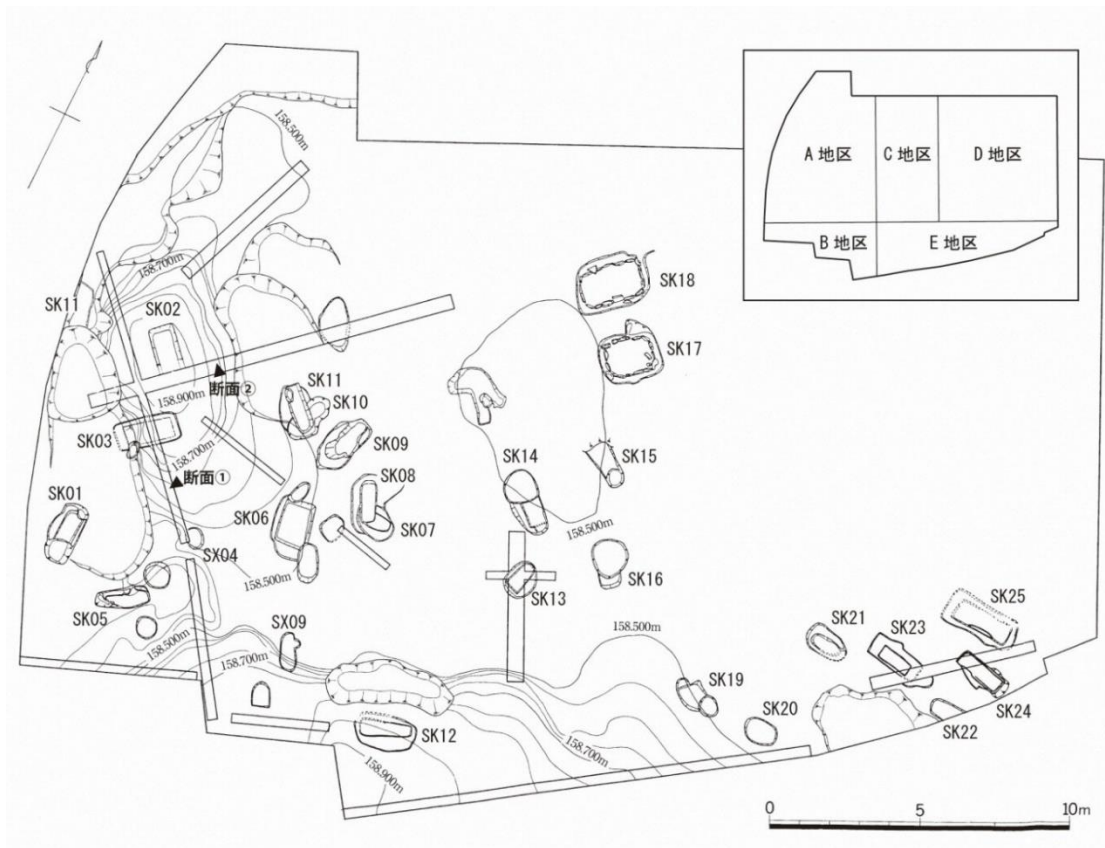


図5 第3~5次調査の遺構配置

### 3 免田式土器が語るもの

重弧文土器を含む土器様式である「免田式土器」は、Ⅱ期（弥生後期後半）に熊本県北部まで分布を広げ、Ⅲ期（弥生終末期）以降、人吉を中心とした球磨川流域に分布が集中する（河森 1998）。その動きは、熊本県における集落の動向と一致する部分があり注目される（以下、時期区分は表 3 による）。

原田範昭氏も指摘するように、熊本県北部では弥生時代前期から中期の遺跡は、自然堤防や谷平野、丘陵端部に立地し、低地部を意識した展開をみせる。一方、後期には台地上に遺跡の立地が変化するとされており（原田 1999）、その画期はⅡ期（弥生後期後半）と考えられる。またⅡ期には、低地を見下ろす台地上の先端部に、うてな遺跡、蒲生上ノ原遺跡、方保田（かとうだ）東原遺跡、石立遺跡、八反畑・八反田遺跡、ヲスギ遺跡、五丁中原遺跡、狩尾湯の口遺跡、新御堂遺跡、上山神遺跡、二子塚遺跡などの環濠集落が出現する（宮崎 1995、杉井 2018）。環濠の断面形態がV字形であるとともに、低地との比高差が 15 から 40m と高地性集落の性格もあわせもち、防御的な機能が想定される。

こうした環濠集落は、白川や緑川流域の熊本平野を挟むように分布するが、熊本平野は甕棺墓や青銅製武器の分布の南限に位置し、弥生時代における北部九州文化圏の南端にあると位置づけられる。環濠集落は、北九州文化圏と「免田式土器」の分布が交差するエリアに集中することから、「免田式土器」の分布拡大による社会的緊張関係の高まりが、環濠集落出現の背景として考えられる。

これを裏付けるように、Ⅲ期（弥生終末期）以降、重弧文土器の分布が球磨川流域に後退すると、緑川以南では田中遺跡をのぞいて環濠集落がみられなくなる。また、環濠集落が継続して形成される菊池川、白川流域のうてな遺跡、蒲生上ノ原遺跡、方保田東原遺跡、狩尾湯の口遺跡などでは、環濠の断面形態がV字からU字形に変化する例が多い。重弧文土器の分布の後退とともに、社会的な緊張関係が緩和した可能性がある。こうした想定が正しければ、本目遺跡で検出された墳丘墓は、Ⅱ期（弥生後期後半）における社会的な緊張関係の高まりを経て、「免田式土器」または重弧文土器の分布が球磨川流域（なかでも人吉盆地）に集中した時期の首長墓として注目される。

最後に重弧文土器の終焉は、Ⅳ期（弥生終末期～古墳初頭）と考えられる（河森 1999）。本目Ⅳ期の様相は、そのあり方を良く示し、この時期の木棺墓には重弧文土器にかわって北部九州に分布する小型壺、高杯の供献や、鉄鏃の副葬がみられる。

古墳時代前期には、宇土半島の基部に前方後円墳が出現し、その南には地下式板石積石室墓が分布する。前方後円墳の出現の背景として、宇土半島の基部が中央政権の最前線にあたることが指摘されているが（杉井 2018）、そうした政治的境界を用意した契機として、弥生時代後期後半における「免田式土器」の動きは注目される。（河森一浩）

表3 中九州における弥生時代後期から古墳時代初頭の併行関係 (河森 1998 を改変)

	菊池川	白川		緑川	球磨川
		熊本平野	阿蘇地域		
I 期	津袋 I 西久保 前田 90・118 住	山尻 15 住	下山西 I 狩尾池田古園 34 住	南原 A	下堀切
II 期	a うてな A 溝	ヲスギ 15 住	下山西 28 住	秋永 新御堂濠	本目 I 期 夏女 56・57・68 住 高ノ原 7 住 入口 1 住
	b 津袋 II (古) 八反畑 2 号溝 伊坂上原 10 住 蒲生上の原 5 住	山尻 16 住	下山西 II 狩尾湯の口 14 住 狩尾池田古園 7 住 柏木谷 6 住	下山神 下松山	
III 期	津袋 II (新) 蒲生上の原 11 住	葉山 山尻 5 住	下山西 III 狩尾湯の口 40 住 陣内 8 住	立田	本目 II 期
					本目 III 期 入口 5 住
IV 期	うてな B 溝 柳町 3・4 号井戸	山尻 2 住	下山西 IV 狩尾前田 5 住 狩尾池田古園 3・ 6 住 狩尾方無田 11・19 住	古閑	本目 IV 期 夏女 1・2・18 住

【表記方法について】

先頭行：中九州（熊本県）の河川流域と各地域

先頭列：中九州（熊本県）の編年時期（本文参照）

項 目：遺跡名／時期（ローマ数字）／出土遺構（5住は「5号住居」を示す）

#### 4 地下式板石積石室墓について

本目遺跡では、九州南部地域に特徴的な墓がみつまっている。それはいわゆる「古墳」ではなく、板石積みでドーム状の小空間（棺）を設ける竪穴式の集団墓（群集墓）である。

**特徴** この墓は、まず地面を円形もしくは方形に掘りくぼめ竪穴を作る。竪穴の径（辺）は最大 2m くらい。深さも最大 0.5m 程度。その穴の掘り方にそって板石（側石）を立て並べて囲う。この石囲いの中に被葬者を直接葬り、周辺に鉄製の武器（刀・矢鏃）などを副葬品として添える。埋葬を終えた後、穴の縁のすこし外側から、側石の天辺を支えに、魚の鱗のように板石を積み重ねていく。その板石を中央にむかってずらしつつ持ち送り状に積んでいくと、天井の空いた石のドームとなる。最後に大きめの板石で天井に蓋をし、その上を土で覆えば、高さ約 1 m 未満の小墳丘となる。

**名称** 1930 年代からこの墓制の研究をしていた鹿児島県出身の考古学者・寺師見国（1889-1959）は、墓制の特徴をふまえ「地下式板石積石室墓」の名称をつけた。しかし、小墳丘下に埋葬施設があることをもって「地下式」とするのは適切ではない。現在は「地下式」を取って「板石積石室（槨・棺）墓」と呼ぶ研究者が多い（藤井 2009、森山 2021）。

**分布** この墓制の分布は大きく 3 つの地域にわかれる。一つ目は熊本県南部の球磨盆地。二つ目は熊本県南西部（葦北地域）から鹿児島県北西部（北薩地域）にかけての有明海沿岸地域。三つ目は北薩の川内川中流域とその上流域にあたる宮崎県北西部（えびの盆地）でもっとも分布が集中する。現在 38 遺跡で計 500 基以上が調査されている。数基から数十基が群集してみつかることが多く、荒毛・尾園遺跡（熊本県人吉市）では推定で 150 基以上、瀬の上・平田遺跡（鹿児島県旧大口市）でもその総数は推定 200 基以上とみられ、これらの推定分を含めると九州南部地域に 800 基以上が存在していたことになる。

**年代** この墓制は、主に古墳時代前期から中期（4・5 世紀）にかけて隆盛したと考えられている。年代の手がかりになる副葬品（とくに鉄鏃）をみると、きっさきが剣先のようなもの（剣頭鏃）を含む組み合わせが古く、古墳時代前期後半（4 世紀後半：中津野式新段階）。二段の逆刺（かえり）をもつもの（二段逆刺鏃）、きっさきが細く関（まち）と呼ばれる段がないもの（鳥舌鏃）を含む組み合わせが古墳時代前期末～中期前半（4 世紀後半から 5 世紀前半：東原式段階）。長頸鏃を含む組み合わせが、古墳時代中期後半（5 世紀後半：辻堂原式段階）となる。1995（平成 7）年に調査された本目遺跡の事例は古墳時代前期後半に位置づけられる（松田 2001）。5 世紀前半をピークに、古墳の影響をうけて墳丘をとともうもの、横穴式石室の影響をうけ大型化するもの、地下式横穴墓と融合するものが出現し、やがて終焉へとむかう。今後は、同時期に存在した日本列島の竪穴系の板石墓制、例えば、弥生時代以来の石棺墓や古墳時代以降の竪穴式石室とどのような関係にあったのか、その初現期が古墳時代前期前半に遡るのかどうか研究課題といえる。（松田 度）



表4 地下式板石積石室墓一覧表 (松田 2001・藤井 2009・森山 2021 を参考に作成)

N o.	遺跡名	所在地	構成 (基)	調査年	年代(鉄鏡)	備考
1	神ノ崎	長崎県北松浦郡小値賀町黒島郷庭ノ畑	2	1983年	5世紀	県史跡/弥生時代の石棺墓と共存
2	宮浦	熊本県葦北郡芦北町宮浦(みやのうら)	3	1970年	5世紀前半	宮浦阿蘇神社一帯/推定20基以上
3	初野	熊本県水俣市初野	5	1977・78年	4世紀後半～ 5世紀前半	初野神社境内に一部現地保存
4	北園上野	熊本県水俣市ひばりヶ丘	29	1989・2014～17年	4世紀後半～ 5世紀前半	銅鏡出土/集落遺跡に隣接
5	妻の鼻	熊本県天草市亀場町亀川下湯	35	1967・68年	5世紀前半～ 中頃	市史跡/出土資料は県指定文化財
6	荒毛尾園	熊本県人吉市下原町荒毛尾園	18	1963・66・78・89・ 91年	4世紀後半～ 5世紀中頃	横穴式石室と共存/推定150基以上
7	高ノ原	熊本県球磨郡錦町木上高ノ原	7	1955・63年		
8	本目	熊本県球磨郡あさぎり町免田西下乙	2	1994・95年	4世紀後半	町史跡
9	新深田	熊本県球磨郡あさぎり町深田北新	9	1975年	4世紀後半～ 5世紀前半	町史跡
10	溝下	鹿児島県出水市文化町道場園	8	1933・57・70・2000 年	4世紀後半～ 5世紀中頃	推定20基
11	堂前	鹿児島県出水市高尾野町柴引	7		4世紀後半～ 5世紀前半	高尾野郷土館に移設復元。推定51基 以上
12	明神下岡	鹿児島県出水郡長島町蔵ノ元明神下岡		1984年	5世紀	町史跡
13	小向江	鹿児島県出水郡長島町山門野小向江	1	1984年	6世紀か	町史跡/加世田公民館横に移築復元
14	脇本	鹿児島県阿久根市脇本新田ヶ丘・糸割淵	3	1969年	5世紀	県・市史跡。横穴式石室・石棺墓と共存
15	鳥越	鹿児島県阿久根市波留鳥越	5	1990・91・95・96 年	4世紀後半～ 5世紀中頃	堅穴式石室有。はまじんちよう公園内に 移設復元
16	横岡	鹿児島県薩摩川内市上川内町釜口	8	1913・14・64・65・ 83・91・95年	5世紀中頃	市史跡。川内歴史資料館に移設復元
17	別府原	鹿児島県薩摩郡さつま町永野別府原(びゅうばる)	10	1967・69・90年	4世紀後半～ 5世紀前半	県史跡。遺跡公園で6基公開
18	尾原	鹿児島県薩摩郡さつま町中津川尾原	10			
19	日露	鹿児島県薩摩郡さつま町中津川北方町	5	1978年	4世紀後半か	
20	小松原	鹿児島県薩摩郡さつま町柏原(かしわばる)上小幡	7	1977・78年	4世紀後半～ 5世紀前半	町史跡
21	水天向	鹿児島県薩摩郡さつま町柏原	1	2009・2010年	5世紀か	
22	湯田原	鹿児島県薩摩郡さつま町湯田(ゆだ)	1	1978年	5世紀前半	町指定/墳丘をもつ
23	大住	鹿児島県伊佐市大口宮人大住(うずん)	45	1958年	4世紀後半～ 5世紀前半	市史跡/推定100基以上
24	焼山	鹿児島県伊佐市大口下殿焼山	11	1946～49・59年	4世紀後半～ 5世紀前半	現地保存/推定90基以上
25	春村	鹿児島県伊佐市大口小木原春村	2	1934年	6世紀か	横穴式石室か
26	大田	鹿児島県伊佐市大口大田	7	1933年	4世紀後半か	
27	諏訪野	鹿児島県伊佐市大口原田	1	1933年	4世紀後半～ 5世紀前半	
28	瀬ノ上・ 平田	鹿児島県伊佐市大口青木瀬ノ上・平田	140	1936・85年	4世紀後半～ 5世紀前半	地下式横穴墓と共存/推定200基以上 /現地保存
29	前目灰塚	鹿児島県伊佐市菱刈前目灰塚(へつか)	1	1979年	5世紀前半	地下式横穴墓と共存
30	前畑	鹿児島県伊佐市菱刈田中		1983・89年		
31	賽ノ神	鹿児島県伊佐市菱刈田中	3	1933年	4世紀後半か	
32	北方	鹿児島県始良郡湧水町北方	1		5世紀前半	墳丘をもつ大型墓
33	永山	鹿児島県始良郡湧水町川西永山	46	1973年	4世紀後半～ 5世紀前半	町史跡/周溝墓有/推定100基以上
34	灰塚	宮崎県えびの市西長江浦灰塚	3	1973年	5世紀前半	
35	杉水流	宮崎県えびの市杉水流(すぎずる)	6			
36	島内	宮崎県えびの市島内平松・杉ノ原	3		5世紀か	地下式横穴墓と共存/横穴式石室との 融合型も
37	小木原蔵	宮崎県えびの市上江小木原(うわえこきばる)	8	1987・88年	4世紀後半～ 5世紀前半	地下式横穴墓と共存
38	広畑	宮崎県えびの市坂元広畑(ひろはた)	5	1989年	4世紀後半か	
39	香禅寺	宮崎県都城市高城町(たかじょうちよう)石山	3	1958年	5世紀か	地下式横穴墓と共存
	総計		461			

## 5 南島からみつめる免田式土器

はじめに 本稿では、免田様式(広義の免田式土器)を代表する器種である重弧文長頸壺(狭義の免田式土器)に焦点をあてる。重弧文長頸壺は、免田様式の分布範囲を超えて、広範囲に拡散した特殊な土器として知られる。この重弧文長頸壺が南九州、南島(南西諸島)へどのように分布しているかを整理し、この土器の移動と関連するであろう事象を指摘し、拡散の意味することに迫りたい。

**大隅半島・薩摩半島の重弧文長頸壺** まずは、南島と熊本をつなぐ地域、南九州の様相を見よう。重弧文長頸壺は、八代平野に近接する地域に多く、大隅半島では僅少となり、地理的勾配が認められる。遺跡の性格は、堂前遺跡などの埋葬遺跡、不動寺遺跡・外川江遺跡などの祭祀遺跡が目立つ。時期は、河森編年のⅡ期、球磨川流域編年の3期に相当するものが主体を占め、南九州の松木菌式に並行し弥生時代後期後半に位置付けられる(河森 1998・1999)。また、八代平野に近い地域では、重弧文長頸壺だけでなく、免田様式を構成する他の器種もみとめられる。

**南島の重弧文長頸壺** 弥生時代から古墳時代並行にかけての時期に、九州島から沖縄諸島にもたらされたすべての土器を調べた成果から南島の重弧文長頸壺の特徴を述べたい(石堂・具志堅 2020)。弥生時代後期後半に九州島から南島にもたらされた土器は、免田様式の重弧文長頸壺と南九州の松木菌様式の甕と壺である。中九州の土器に限れば、南島にもたらされたものは重弧文長頸壺しか知られていない。時期は、河森編年のⅡ期、球磨川流域編年の3期に限定される。また、様式としての免田式は波及せずに、重弧文長頸壺のみがもたらされたことは重要で、このことは、重弧文長頸壺が実際にどのように、何のために使われたものなのか等を知る意味でも示唆的である。

**鳥ノ峯遺跡の重弧文長頸壺** 種子島の鳥ノ峯遺跡は、覆石墓制と呼ばれるこの地域に独特の墓制を主体とする弥生時代後期後半～古墳時代前期の集団墓地として知られる。鳥ノ峯遺跡の最古段階の覆石墓群の一角から、河森編年Ⅱ期の重弧文長頸壺が出土していることは重要で、覆石墓制の習俗は、重弧文長頸壺の南島地域への波及と関連付けられる可能性がある。重弧文長頸壺の南島への搬入は、単に土器が南島にもたらされた事実を示すだけでなく、その背景にある様々な事象との相関を物語るものであろう。例えば、近年、木下尚子はオオツタノハ貝輪の使用が再開する時期を、弥生時代後期後半の北部九州に見出そうとしている。一方で、種子島においてオオツタノハ貝輪習俗が再開する時期は、弥生時代終末～古墳時代初頭であり、重弧文長頸壺が南島に波及した時期より一段階遅れて、オオツタノハ貝輪習俗の再開が認められる。また、オオツタノハ貝輪習俗の再開とほぼ同時期に、南島で貝符に代表される新たな貝文化が生まれることも興味深い。木下尚子は、貝交易は常に九州島(列島)の要望により開始され、列島側の需要が無くなると消滅するとみているが、南島

と九州島との貝交易・土器の搬入をみると、時期によりその主体となる九州島側の地域は移り変わり、このことは間接的に九州島における政治・交易ルートの変化を反映しているものとみられる。

**南島からみつめる免田式土器** 南島に、貝符に代表される新たな貝文化が誕生し、九州島には邪馬台国の時代を経て古墳文化が展開するその前夜に、重弧文長頸壺は南島に拡散する。南の島々で見つかる免田式土器のカケラは、大きな時代の変化の物語を内に秘めている。

(石堂和博)



図6 南九州及び南島（南西諸島）出土の重弧文長頸壺

## 6 あさぎり町に期待する事

**球磨盆地の中のあさぎり町** 九州山地のなかに葉先を東にむけて木の葉をおいたような球磨盆地、そのまんなかにあさぎり町がある。球磨盆地を西にながれる球磨川に井口川、免田川、松ヶ野川、田頭川、銅山川がそそぎこみ、葉脈のように水系がひろがっている。球磨川の右岸には凝灰岩の崖がきりたち、左岸には下位段丘面がひろがっている。この段丘面は洪水の心配がない平地だ。あさぎり町は、広大な川端の低地と丘上の平地、ほどよい硬さの凝灰岩の路頭にめぐまれ、広葉樹がしげる山々にかこまれている。



あさぎり町の風景

あさぎり町と僕とのおつきあいは、もう30年にもなろうとしている。沖松遺跡の調査担当者の一人として数ヶ月すごしたり、熊本大学考古学研究室の鬼の釜古墳実測調査や佐古和枝先生の本目遺跡発掘調査を見学に訪れたりしているから、考古学の調査を主軸としたおつきあいだ。沖松遺跡では古墳時代の竪穴式住居から鹿児島島の土器によく似た甕を発掘して、南寄りの地域性を実感した。巨石で組まれた鬼の釜古墳の石室の前では、玄門を刳りぬいた石工の技術と道具に心底驚かされた。石室のみごとは才園古墳も同様だが、こちらはむしろ塗金鏡・馬具・刀といった出土遺物がしめす金工の技術に目をうばわれてしまった。本目遺跡では、弥生時代の土壙墓・木棺墓・墳丘墓から古墳時代の地下式板石積石室墓まで営まれた墓地をみて、時期も形も異なる墓葬がひとつの墓地でつづいていることに気がついた。そして、時期も形も異なる墓葬に納められた品々が、弥生時代には青銅鏡（破鏡）・ガラス玉・管玉といった装身具、古墳時代には鉄剣・鉄鏃といった武具というように、順序よく遷りかわっていることに、とても心が惹かれていった。

本目遺跡の弥生時代の墓葬に納められた品々は、中国からもたらされた青銅鏡（方格規矩四神鏡）、インド・東南アジアからもたらされたガラス玉（インド・パシフィック・ビーズ）など、海のはるか彼方から運ばれてきた履歴をもっている。しかし、特別大きな墓に納められていたわけではない。畳一枚ほどの大きさの墓がいくつも群れたその一つ一つから、被葬者が身にまとった状態で出土しているのだ。このことから、舶来の素晴らしい品々を特別大きな墓に詰めこむ単純でおめでたい文化ではなく、特級の品々であっても故人の身につけておくる品格をそなえた文化が本目遺跡にはある、とわかる。

本目遺跡の墳丘墓にのぼり北を望めば、九州山地のなかに、球磨川水系最大の支流、川辺川がひらいた谷筋がすっとおっている。東方に目を転じれば、弥生時代の墓葬群が市房山にむかって伸び、その脇に古墳時代の墓葬群が設えられた様相を目のあたりにすることが

できる。球磨盆地の中でも遠くをみとおせる場所に、本目遺跡の墓葬群はさほど大きさを変えずに、その構造をすこしずつかえながら、弥生時代から古墳時代までつづけて営まれていた、とわかる。そして、大きいことはいいことだと言わんばかりに墓を大きくして突然その形も変えてしまう社会とは異なり、遷りかわりを順序よくすすめてきた社会の存在を本目遺跡は示すことができる、と気づかされるのだ。

このように、あさぎり町の遺跡と遺物は、弥生時代から古墳時代への遷りかわりを知りたい者には、すこぶる魅力的にうつる。日本列島での国家のつくりかたを考えるヒントが、ここかしこに散らばっているからだ。

**あさぎり町の位置と構造** あさぎり町の魅力あふれる遺跡と遺物をたずねあるうちに、僕は、あさぎり町の位置と構造を知りたい、とおもうようになった。位置なんか地図をみればすぐわかるよ、なんならスマホで見せてあげようか、と言われそう。しかし、僕が知りたいのは、そのような地理の数値的な位置ではない。弥生時代や古墳時代といった、そのときどきにあさぎり町の人と社会のありようを知りたい、とおもっている。

あさぎり町の弥生時代は、南九州の影響が大きく北九州の影響は少ない、といわれる。弥生土器の甕を例にすると、大別すれば南九州の台付き甕とそれ以外となるので、たしかにそのとおりだ。しかし、熊本の甕、鹿児島甕、長崎甕、宮崎、大分、福岡の甕、各地域の甕は大きさもつくりもそれぞれだ。近ごろは、熊本では菊池川流域と白川・緑川流域、鹿児島では薩摩半島と大隅半島でも差異がはっきりと認識されてきた。南九州とか北九州とかいうことばは、漠然たる位置や内容をあらわすにはたいへん便利なことばだけれど、すこし精密な議論をたてようとするともう役に立たなくなってきた。そのような表示法では、あさぎり町の位置を表示できないのだ。

あるものの位置を測る方法のひとつに、いくつかものをならべくらべて、その位置を測りさだめる方法がある。ちょうどよいことに、熊本には球磨盆地とよく似た地形が南北に並んでいる。北から菊鹿盆地、阿蘇谷、南郷谷であり、それぞれ菊池川、白川水系黒川、白川がながれる70 km<sup>2</sup>ほどの盆地である。三つの盆地と球磨盆地は、地形と規模のほか、海から遠いこと、多くの遺跡があることでもよく似ている。弥生時代を例にとれば、菊鹿盆地には方保田東原遺跡・うてな遺跡・小野崎遺跡、阿蘇谷には宮山遺跡・下山西遺跡・狩尾遺跡群・小野原遺跡群、南郷谷には柏木谷遺跡・南鶴遺跡・幅・津留遺跡があり、集落や墓の様相がつかめる。三つの盆地の遺跡群と、本目遺跡をはじめとする球磨盆地の遺跡群を対象として、それぞれに固有の要素や共通する要素をならべくらべれば、あさぎり町の位置を測りさだめることができるだろう。また、それぞれの弥生時代から古墳時代への遷りかわりを比較することもできる。いくつかの地域の遷りかわりをならべくらべれば、国をかたちづくる流れもみえてくるにちがいない。

頭の中でかんがえると、北九州と南九州との比較といえいかにもきれいに九州を論じたような気になるが、じっさいは、北でも南でもない部分を忘れていただけである。北でも南でもない部分、例えば球磨盆地にはいくつもの固有の現象がある。多良木町の鍵掛松遺跡から出土した最古式の細形銅剣やあさぎり町の才園古墳から出土した鍔金鏡といった特級品が、海から遠いあさぎり町の界隈にあるのだ。これら特級の素材を、あさぎり町の人々はどうのように編みこんで地域社会を形つくっていったのか。その構造をあきらかにすることは、あさぎり町の由来を知るにとどまらず、熊本、九州そして日本列島の形をみつめなおす楽しい時間となるだろう。 (宮崎敬士)

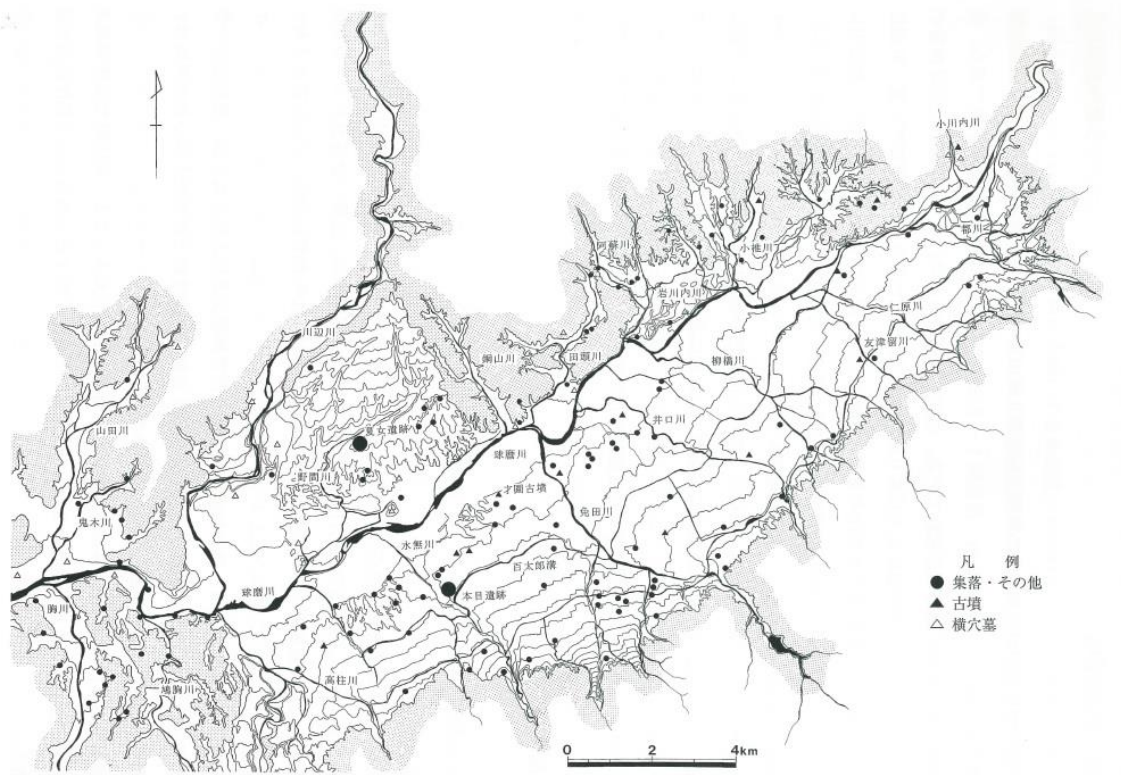


図7 球磨盆地の遺跡分布地図 (免田町教育委員会 2001 『本目 第3次～5次発掘調査報告』)



## 参考文献一覧

### 【第1章】

- 乙益重隆 1986年「第一章 先史時代」「第二章 原史時代」『免田町史』免田町
- 木崎康弘 2017年『肥後と球磨、その原史世界に魅せられし人々—肥後と球磨の考古学史—』人吉中央出版社
- 九州日日新聞社 1916年「舊石器時代と人種に就いて 柴田文学士談」『九州日日新聞』（7月11日付け）
- 後藤守一 1930年「135 弥生式土器」『世界美術全集』4 平凡社
- 坂口圭太郎 1993年「球磨地方の免田式土器」『熊本県立装飾古墳館 研究紀要』第1集
- 闍幽舎主人 1988年 a 「古代武器」『文』1—17 金港堂 1888年
- 闍幽舎主人 1988年 b 「再度古代武器ノ由来ヲ説テ坪井正五郎君ノ質疑ニ答フ」『文』1—24 金港堂
- 高田素次 1986年『しらがね帖』球磨郷土研究会
- 高田素次・乙益重隆 1937年「肥後国免田町本目出土の弥生式土器」『考古学』8—11 東京考古学会
- 坪井正五郎 1988年「闍幽舎主人ノ古代武器考ニ付キテ」『文』1—18 金港堂
- 寺石正路 1889年「渦紋土器ノ製法」『東京人類学会雑誌』5—46 東京人類学会
- 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治 1919年『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第三冊』京都帝国大学
- 免田町史編纂委員会編 2003年『免田町史』第3巻
- 免田町教育委員会編 1996年『本目 第1次・第2次調査報告（付）才園古墳塗金神獸鏡』免田町文化財調査報告第2集
- 免田町教育委員会編 2001年『本目 第3次～5次発掘調査報告』免田町文化財調査報告第3集
- 森浩一 1990年「クマソの塗金鏡」『交錯の日本史』朝日新聞社
- 森浩一 1991年「地域に勇気を与える学問」『古代史発掘 88' ~90'』朝日新聞社

### 【第2章】

- 乙益重隆 1954年『肥後上代文化史』郷土文化叢書8 日本談義社
- 河森一浩 1998年「免田式土器の再検討」『肥後考古』11 肥後考古学会 pp. 13-25
- 河森一浩 1999年「重弧土器の終焉—中・南九州における古墳時代初頭前後の一動向—」『文化学年報48』pp. 59-83
- 河森一浩 2001年「本目遺跡出土土器の編年とその位置づけ—南九州を中心に—」『本目 第3次～5次発掘調査報告』免田町文化財調査報告書第3集
- 石堂和博・具志堅清大 2020年「大隅諸島系土器の分布とその意義」『広田遺跡の研究』pp. 30-47
- 杉井健 2018「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景 なぜそこに古墳は築かれたのか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集
- 西健一郎 1988年「地下式板石積石室墓の基礎的研究」『九州大学文学部九州文化史研究所紀要』第33号
- 原田範昭 1999「熊本」『弥生時代の集落—中・後期を中心として—』第45回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 藤井大祐 2009年「古墳時代薩摩地域における石棺墓の展開と特質—板石積石棺墓を中心に—」『薩摩加世田 奥山古墳の研究』鹿児島大学総合博物館研究報告 No. 4
- 松田度 2001年「本目遺跡SK17・18の検討—地下式板石積石室墓にみる地域文化のあり方—」『本目 第3次～5次調査報告書』免田町文化財調査報告書第3集
- 宮崎敬士 1995「九州4（熊本県）」『ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—』第37回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料
- 森山栄一 2021年「石室の名称と構造」『古文化談叢』87号

## 第3章 本目遺跡は、みんなの宝～市民参加の保存・活用

### 1 遺跡を活かしたまちづくり

1996（平成8）年11月、現地保存が決まった本目遺跡（墳丘墓とその周辺地区）は、町史跡公園として整備され現在に至ります。現地には免田式土器を模した巨大なモニュメントが設置され、盛土で保存された墳丘墓の高まりからは往時の風景がほのみえます。

2003（平成15）年には上村・免田町・岡原村・須恵村・深田村の1町4村が合併してあさぎり町が誕生し、本目遺跡とその出土品一括は、あさぎり町指定文化財として新町に引き継がれることとなりました。

その後、2008（平成20）年にふとした縁で本目遺跡発掘調査団のメンバーが連絡を取り合うようになりました。やがて、発掘から15年目を迎える節目に、もう一度本目遺跡に集ろうという話がきっかけとなり2009（平成21）年9月20日には、あさぎり町教育委員会主催の発掘15周年記念イベント「遺跡を活かしたまちづくり～本目遺跡から」が開催されました。

午前中は「子ども体験教室」と題して、遺跡公園でワークショップ（ストラップ作り）を開催。午後は、深田地区公民館（せきれい館）で本目遺跡に関する企画展示とシンポジウム「遺跡を活かしたまちづくり～本目遺跡から」がおこなわれました。関西外国語大学・佐古和枝教授の基調講演に続いて、三重大学の八賀晋名誉教授、熊本県文化財課の宮崎敬士氏、あさぎり町文化協会会長の犬童賢二氏に佐古氏を加えてパネルディスカッションがおこなわれ、シンポジウムの最後には、当時学生だった発掘調査団のメンバーが調査時の思い出を語りました。また、その日の夜は、15年前に発掘調査にかかわった関係者も一同に介しての懇親会などがおこなわれ、遺跡をつうじて育まれた友情を分かち合いました。この時再結集した発掘調査団のメンバーは、本目遺跡での経験を活かして考古学で地域に勇気をあたえる活動を続けていこうと誓い合い、新たなメンバーを加えて2010（平成22）年8月に「本目遺跡研究会（通称：ファンキー5）」を発足させるに至りました。（松田度）



現在の本目遺跡公園



遺跡公園でのワークショップ  
のようす（2009年9月）



シンポジウムのようす  
（2009年9月）



## 2 20周年記念シンポジウムの記録

20周年記念シンポジウムは2015（平成27）年8月23日、本目遺跡の発掘調査と「クマソ復権」をきっかけに、あさぎり町で歴史文化に根ざしたまちづくりや地域活性化をめざしていこうと開催されました。

「時間・空間・人間とまちづくり～過去から未来へのまなざし～」をテーマに、「球磨のしあわせ小宇宙・まちづくりシンポジウム」と題して行われたこのシンポジウム。町民が参加し、一緒に考えていくことを目指し、オープニングでは、幼少の頃に本目遺跡の発掘調査に参加した浦本真道氏が会長を務める火の国エイサー琉跳会による琉球太鼓エイサーが披露され、民俗芸能によって「免田式土器がつなぐ琉球弧と現在」を表現しました。

また、シンポジウムの一環として、あさぎり町の歴史・文化の魅力をみんなで発見しようといわれた「あさぎり町フォトコンテスト・球磨のしあわせ小宇宙」の審査発表と表彰式が催され、写真家十文字美信氏による講評がなされました。

記念講演では、西村幸夫氏（東京大学教授）に「文化遺産とまちづくり」、中川幾郎氏（帝塚山大学名誉教授）に「あさぎり町の魅力とその課題」と題して、それぞれご講演いただきました。続いて、佐古和枝氏「本目遺跡と“クマソ復権”」、河森一浩氏「身近な景観が歴史と現在をつなぐ」、犬童賢二氏「遺跡、ワークショップと芸術活動～あさぎり町の事例～」、石堂和博氏「遺跡、ワークショップと芸術活動～南種子町の事例～」の4本の事例が報告されました。最後に、「文化遺産とまちづくり」をテーマに、コーディネーターに中川幾郎氏、パネリストに愛甲一典町長（当時）、西村幸夫氏、藤島紘陽氏、犬童賢二氏、浦本真道氏、佐古和枝氏を迎えて、熱気あふれるパネルディスカッションが展開されました。

「私達のあさぎり町を元気にする」との提言にあふれたこのシンポジウムの講演録やシンポジウム冊子は、奈良文化財研究所の全国遺跡報告総覧ホームページからPDFでダウンロードできますので、ぜひ、ご一読いただければと思います。

なお、このシンポジウムでは、町民の皆様が、あさぎり町の文化財を体験し、活かすことに資するために、以下の3つのイベントを行っています。（石堂和博）

- (1) あさぎり町フォトコンテスト「球磨のしあわせ小宇宙」  
第1次募集（春・夏）2015（平成27）年5月6日から8月6日  
第2次募集（秋・冬）8月23日から2016（平成28）年2月4日
- (2) 遺跡ウォーク「免田式土器とりゅう金鏡の里を歩く」  
日時：2015（平成27）年8月22日（土）午前9時から正午  
集合：おかどめ幸福駅
- (3) 古代体験ワークショップ  
①ガラス玉と缶バッチ ②プラバンキーホルダーと七宝焼き  
日時：2015（平成27）年8月22日（土）13時～16時  
会場：あさぎり町生涯学習センター

本日常遊館開館20周年記念

# 時間・空間・人間とまちづくり

～過去から未来へのまなざし～

**8月23日(日) 午後1時から**  
 会場：あさぎり町須恵文化ホール 大ホール (入場無料)

球磨のしあわせ小宇宙  
**まちづくりシンポジウム**

この事業は公益財団法人「あさぎり町まちづくり推進委員会」の協力を得て実施いたします。

【オープニング・セレモニー】  
 祝賀式典  
 「あさぎり町まちづくり推進委員会」代表理事 西村幸夫氏  
 「あさぎり町まちづくり推進委員会」代表理事 西村幸夫氏

【第1部】記念講演  
 「あさぎり町の歴史と未来」  
 西村幸夫氏  
 (安芸大学地域研究センター所長)

【第2部】基調講演  
 「まちづくりの未来」  
 西村幸夫氏 氏  
 (京大府立大学教授、本館館長)

【第3部】パネルディスカッション  
 「文化遺産とまちづくり」  
 コーディネーター：中川幾郎氏  
 参加者：西村幸夫氏、西村幸夫氏、西村幸夫氏

主催：あさぎり町、あさぎり町まちづくり推進委員会  
 協賛：あさぎり町、あさぎり町まちづくり推進委員会、あさぎり町まちづくり推進委員会  
 〒966-0405 桂木郡神郷町あさぎり町角田1774 TEL: 0966-(45) 2226 FAX: 0966-(45) 2227



基調講演 西村幸夫氏



基調講演 中川幾郎氏

あさぎり町まちづくりシンポジウムチラシ



パネルディスカッション



あさぎり町フォトコンテスト



遺跡ウォーク

「免田式土器とりゅう金鏡の里を歩く」



古代体験ワークショップ

表5 関連年表

和暦 (年)	西暦 (年)	月日	出来事
昭和63	1988	12	森浩一同志社大学教授(当時)が『アサヒグラフ』の連載で、免田町・才園古墳出土の鍔金鏡と免田式土器をとりあげ、記紀の説話で印象づけられた「クマソ」に対する認識を、考古学の立場から見直す必要があると主張した。 ・金メッキした鏡は日本で3枚しか出土していない貴重品。 ・免田式土器は、弥生土器のなかでもっとも気品のある土器ともいわれる。
平成2	1990		免田町職員が森浩一氏の指導の下に「クマソ復権」のまちおこしを企画。
平成5	1993	3	免田町長が定例議会で「クマソ復権元年」宣言。
		4	森浩一氏の講演会「クマソと中国文化」を開催。町民1,000人が参加。講演では「クマソを辺境の蛮族とする記紀のイメージは間違っている。ヤマトをしのぐ文化をもった有力勢力だった」と主張。
		9	免田町役場に「クマソ文庫」設置。 免田町会議員を中心に、りゅう金鏡の故地中国浙江省への交流団を派遣。中国浙江省文物考古研究所の王士倫所長(考古学者・鏡が専門)から、才園古墳の鍔金鏡は2～3世紀頃、江南の地で製作された鏡との写真鑑定をうける。
		10	中国交流団の報告会で、町長が「クマソ資料館を造り、才園古墳の鏡を熊本博物館からふるさとに戻し、クマソ復権のシンボルとしたい」と表明。 この年、熊本県民テレビ局にて、町住民が主体となって <b>クマソ復権テレビドラマの制作</b> 。裏方を含めて町民の3分の1の約2000人が参加した(全人口6300人、出演者は1000人)。
平成6	1994	1	熊本県民テレビでクマソ復権ドラマを放映。
		3	<b>本目遺跡第1次発掘調査(3月15日～30日)</b> 「本目遺跡発掘調査通信」の発行開始、町内全戸に配布(～9月発行の4号まで)
		6	県民文化祭の事前学習として、中球磨5町村の教育関係者・議員ら約80名を対象に、佐古和枝氏が講演。
		7～8	<b>本目遺跡第2次発掘調査(7月25日～8月25日)</b>
		8	発掘調査団のメンバーが「おどんが祭」に参加。
		10	第7回県民文化祭・人吉球磨にて「古代とクマソ講演会」を開催。 ・王士倫氏の講演会ならびに森浩一氏、黒岩重吾氏(作家)、宮崎淑子氏(女優)の座談会。 ・30年ぶりに才園古墳の鏡が里帰り。会場にて展示。
		12	本目遺跡で無届けの宅地開発がおこなわれ、大量の土器が出土しているとの報告あり。 <b>本目遺跡緊急調査(第3次)を実施(12月10日～12月28日)。</b>
平成7	1995	2～3	<b>本目遺跡第4次発掘調査(2月6日～3月25日)。</b> 熊本県南部で初の墳丘墓と破鏡を検出。
		7～8	<b>本目遺跡第5次発掘調査(7月21日～8月31日)。</b>
		8	8月下旬、本目遺跡(墳丘墓とその周辺)の保存問題が全員協議会で協議され、町長に一任されることになった。以後、保存に向けての協議がはじまる。
平成8	1996	1	本目遺跡第1・2次調査報告書刊行。
		11	<b>11月28日、本目遺跡(墳丘墓とその周辺)の保存決定(町史跡に指定)。</b>
平成9	1997	4	<b>4月1日、町史跡地が本目遺跡公園としてオープン。</b>
平成13	2001	3	本目遺跡第3～5次調査報告書刊行。
平成15	2003	2	2月17日、本目遺跡出土品一括が免田町指定文化財に。
		4	免田町を含む1町4村が合併してあさぎり町発足。 本目遺跡はあさぎり町指定史跡となり、出土品一括はあさぎり町指定文化財に。
平成20	2008		発掘調査に参加したメンバーが発掘15周年を前に連絡をとりあう。
平成21	2009	9	あさぎり町で本目遺跡発掘15周年記念イベント開催。
平成22	2010	8	本目遺跡調査団のメンバーで本目遺跡研究会発足。
平成26	2014	8	8月23・24日、あさぎり町で本目遺跡発掘20周年プレ・イベント(講演会ほか)開催。
平成27	2015	8	8月22・23日、あさぎり町で本目遺跡発掘20周年イベント(まちづくりシンポジウムほか)開催。
令和3	2021		本目遺跡発掘調査から25周年を記念し、あさぎり町教育委員会は弥生時代・古墳時代や考古学をテーマとした令和3年度あさぎり町文化財講座(計4回)を開催。
令和4	2022	3	<b>記念誌『本目遺跡のあゆみ』刊行。</b>

### 3 25周年によせてのメッセージ

#### (1) 発掘調査の思い出

調査に参加するきっかけは、夏休み直前の関西外国語大学の廊下での出来事でした。「先生、この夏発掘するんですか？」という私の問いに、初対面の佐古先生は「土いじり、好きならできるよ。それに、肉と焼酎は食べ放題、飲み放題よ。」と目をキラキラさせて答えてくれました。当時20歳の私はその言葉の魅力に気を失いかけ、気づいた時にはバイクで免田東の交差点付近を走っていました。

発掘調査に集まったメンバーは、関西外国語大学、奈良芸術短期大学、三重大学、そしてこの発掘のブレンとなる同志社大学の学生達。肉と焼酎に誘われてきたこれらの学生は、初対面と思えない程に意気投合し、佐古先生・八賀先生のもと畜産センター（現「免田畜産センター」）で共同生活を送ります。その共同生活は、①朝ご飯を作るのは二人一組の当番制。当番が作る料理に文句は言わない決まり。焦げていたり、よくわからないものが出たり。②午前中の発掘のあとは畜産センターに戻り、西村さんが作ってくれるお昼ご飯。いつも激ウマ。③食後は小一時間の昼寝タイム。泥んこのまま、誰もが死んだように眠りに落ちる。ちなみに、爆睡中のK森にはいつも人一倍ハエがたかり、「死んでるんじゃないか？」と毎回心配される。④“猛烈な暑さとの闘い”の午後の調査を終えると、西村さんの晩御飯。何度も書くが、本当においしい。いや、決して朝ごはんがまずいと言っているわけではない。⑤食後は皿洗いと、持ち時間一人10分のお風呂。⑥夜の洗濯は二人一組の当番制。洗濯機を何度回しても泥は落ちないので、ほどほどであきらめる。これが、私達学生の普段の一日でした。そして、この“普段の一日”には、地元の人達によって想像を超える数々の懇親会やイベントが付け加えられていきます。これが本当にすごかった。どうすごかったかは後述しますが、それまで考古学や発掘調査とは全く縁のなかった私にとって、すべてが衝撃的で、なぜか毎日満腹、そして毎日二日酔い。こ、これが考古学の世界か…

まずは、発掘調査のまじめな話から。発掘は、本当に猛烈な暑さとの戦いでした。ひと言で表現すると「過酷」。当時は“熱中症”の言葉はまだなく、“日射病”と言われていた時代。佐古先生が知恵を絞り、ついには現場に寒冷紗の屋根がつく程です。それから、調査技術に関しては、普段はとても優しいあの八賀先生が時には鬼になることもありました。特に遺構の精査や実測図には妥協を許さず、下手くそな私達（私だけ？）は先生にちょくちょく指導を受けました。優しい先生から厳しい指導を受けると、こんな私でも少しだけですがへこみます。そして、ちょっとへこんだふりをしている私を横目に、二日酔いで「ウツ」と言いながら代わる代わる消えていく同志社大一年生の松田君と壱岐君…。



このような過酷な現場でしたが、みんなの楽しみが一つありました。それは、「休憩時間」。休憩時間は、発掘を一緒にしているお母さん達の手作り漬物やお菓子がいつもずらりと並びました。ほんとにずらり。それを、お母さん達のスペシャルトークを聞きながらゆっくりほっこり、ぱくぱくぱくぱく。また、ありがたいことに現場にはたくさんの人



発掘作業員のお母さん達と一緒に

達が遊びに来てくれました。地元の子も達をはじめ、町民の方、役場の皆さん、議員さん、大学の先生、などなど、ほぼ毎日どなたかが来られ、アイスクリームやかき氷、飲み物などを差し入れてくれました。もちろん、夜はこの差し入れが、「球磨焼酎」に変わります…。ここからが、「本目遺跡発掘調査」の本番の始まり。場所や時間、曜日を問わず、ほぼ毎日といってもいいぐらい地元の皆さんが集まってくれ、佐古先生の言葉以上の「肉」と「球磨焼酎」が。そのすごさは、私のつたない文章では表現できません。本当にすみません。そこでは、「気づけばお皿の上に肉が山盛りになっている…」、「気付けばコップが焼酎で満たされている…。炎天下の発掘でへろへろのはずなのに、毎回地元の皆さんや発掘メンバーと酔っぱらいながらするおしゃべりが、いつも楽しくて、楽しくて。食べては飲み、飲むではしゃべり、しゃべっては食べる。このエンドレスにも思える三角関係は、大抵はトイレから戻れなくなった人達が増えてくると、ようやく終焉を迎えるのでした。そして、私や松田君だけでなく、ほとんどのメンバーが午前中の発掘は基本的に二日酔い…（佐古先生、ごめんなさい。地元の皆さんありがとう。）

それ以外にも、この紙面では書ききれないぐらい地元の皆さんには本当に、本当にお世話になりました。球磨川での投網や、ギリギリで優勝を逃したおどんが祭り、「町内全域の草刈り」か「食べ放題」かを賭けた議員の皆さんとの本気のソフトボール大会、みんなの口が真っ青で「カゴより口に入れる方が絶対多いやろ！」と思わずツッコんでしまったブルーベリー摘み、などなど、発掘している時間よりも地元の皆さんと過ごす時間の方が何倍も長く感じた「本目遺跡発掘調査」。本目遺跡が持つ本当の力は、学術的なものだけでなく、「人を集める力」なのかもしれません。発掘メンバーや地元の皆さんとの貴重な出会いをした人生初の発掘調査は、私の中の価値観を大きく変え、そのまま人生の方向すら変えてしまいました。頂いた肉と焼酎と底なしの優しい思いは、今なお私の血となり肉となり大切な人生の一部となっています。

（松原信之）

## (2) 免田町職員として経験した本目遺跡の発掘調査

『古事記』や『日本書紀』に「野蛮な民」として記されたクマソと、その活動拠点だったとされる球磨地方。私をはじめ多くの友人達も、辺地とされていた故郷、球磨地方には誇るべき歴史はないと考えていました。

しかし、才園古墳出土の鍔金獣帯鏡の貴重性を知り、免田式土器の重要性を知ったことで、私達の故郷には、古より素晴らしい文化を持った先人がいたことが分かりました。そのとき、私達は故郷に誇りをもち、さらに埋没した歴史をもっと探りたいと考えました。

そして、本目遺跡の発掘調査がはじまり、私も行政職員として1994（平成6）年7月25日よりはじまった本目遺跡第2次発掘調査に参加しました。関西外国語大学の佐古和枝先生を主とする発掘調査団には、三重大学の八賀晋教授や関西外国語大学・同志社大学の学生達も参加され、地元の女性の方々にもお手伝いいただきました。発掘調査団は、経費削減のため畜産センターに寝泊りし、毎日調査で汗まみれ、土まみれになりながら頑張っていました。

三重大学の八賀教授は、忙しい試掘調査の合間に、住民向けの「94 くまセミナー」や「免田町高齢者大学」で講師として講演していただきました。

佐古先生や学生達も、「親子土器づくり教室」で子ども達に熱心に教えていただきました。一方で、地域住民と盛んに交流いただき、当時、盛大に催されていた夏祭「おどんが祭」には、免田式土器をかたどった大きな張りぼてに身を包んだ学生達が参加して祭りを盛り上げてくれました。また、議員チームと発掘調査団によるソフトボール親睦試合など、若者のエネルギーが町のあちらこちらを元気にしてくれました。

お手伝いのおばちゃん達が話す球磨弁で会話ができるようになった学生達とおばちゃんとの交流も楽しそうでした。

発掘調査では、免田式土器等いろいろな遺物が出土し、1994（平成6）年8月21日には本目遺跡現地説明会が開催されました。その後、発掘調査は第5次調査（1995年）まで続き、1996（平成8）年及び2001（平成13）年にはその成果を取りまとめた報告書が作成されました。そして、誇るべき歴史はないと考えていた故郷で、またひとつ古代の新しい歴史が明らかにされ、子ども達に受け継ぐことができました。発掘調査にご尽力いただきました佐古先生をはじめ関係者の皆様へ感謝申し上げます。（前田洋）



ソフトボール親睦試合のようす

### (3) 遺跡から学んだこと、伝えたいこと①

本目遺跡の発掘 20 周年の閉会式で「やれる人が、やれる事を、やれる時にやろう」との申し合わせの後で発足したのが「あさぎり町くまそアカデミー」です。

毎年、4・5・6 年生の小学生 30 人らが、月 1 回の活動日に集まり、石器作り、火起こし体験、古墳めぐり、高校生との古代米の栽培、親子キャンプ、古代料理作り等に挑戦しています。

また、2018（平成 30）年には、あさぎり町教育委員会の共催のもと、「チョコレートで琉金鏡をつくろう！」や「古代人の知恵を学ぶ～赤米と地元野菜でつくるクマソ料理」を実施する等、町が誇る文化財や古代の人々の生活について楽しく学んでいます。

本目遺跡の発掘に参加した学生さん達も、現在は各地の自治体で文化財担当職員として活躍しており、時々町にやってきて考古学のワークショップを手伝ってくれています。本務で忙しいなかでも、常に「あさぎり町くまそアカデミー」の Line でつながっているのが、とても心強いです。

（浦本秀正）



くまそアカデミー活動の様子  
(2021 年 10 月)

### 遺跡から学んだこと、伝えたいこと②

今から 28 年程前、本目遺跡の発掘が行われていた際、八賀先生、佐古先生と、先生方が引率してきた学生の方々が、朝から暗くなるまで、連日土に這いつくばって、発掘を進めていました。その姿は、当時小学 5 年生だった私の目には、ただただ大人達が楽しそうに土いじりをしているように映り、羨ましく思えました。

はじめは、父が教育委員会に属していたことから、発掘現場の見学に赴いたのですが、その光景を見てからは、夏休みだったこともあり、自ら自転車で 30 分ほどかけて発掘現場見学に通うようになりました。

調査の間、わが家に大学生が下宿していたこともあり、発掘現場の方々とはすぐに顔見知りになりました。そんな矢先、木の枝を使って近くの土で発掘の真似事をしていると、「未来の考古学者が誕生したな。手伝ってくれんか。一緒に発



発掘調査のようす



掘しよう」と先生方が現場のなかに誘ってくださいました。それまで見学していて、この場所が普通と違う大切な所なのだと感じ取っていた私が、恐る恐る発掘現場に足を踏み入れていくと、「大丈夫。ここは未来の君達を守っていく場所だから、しっかり見てほしい」と八賀先生が声をかけてくださいました。

恐竜の化石でも出てくるのではないかと胸を高鳴らせながら、竹串と刷毛を使ってかき分けていく土からは古代の空気が香り、特別な場所で発掘の手伝いが続けられていることをとても誇らしく感じていました。

「先生、土器が出てきた!」「なんとなあ〜!大発見だ」小さな破片を見つけては報告しました。

「先生、大きいの見つけた!」「すごいなあ。慎重に掘り出してよ」「先生、どんどん大きくなる…」先生方は、別の作業を続けながらも、必ず返事を返してくれました。「お〜大物発見だね〜」「ねえ、先生…大きなお皿が出てきたよ…」「ん?え?ちょっと見せてみて!」本当に大きな一枚の皿が出土した時は、現場がどよめいたのを覚えています。



子ども現地説明会のようす  
(第3次調査時)

発掘作業が終わり、先生方や学生さん達はそれぞれの大学に帰って行かれましたが、私は本目遺跡に行けばまた誰かがいるような気がして、何度か発掘現場に自転車を向かわせては、寂しく帰ることがありました。

熊本県の田舎町。観光できるところを問われたら、考え込んでしまう町民も少なくはないのかもしれませんが。しかし、私は28年前のあの時、竹串と刷毛を持ち、古代の香りを体験しました。発掘から28年以上経ちましたが、先生方や発掘に参加した元学生さん達は、今でも、「この町とこの町の人達が大好きなんです」とことあるごとに訪れてくださります。

先生や元学生さん達と再会するたびにあの古代の香りがよみがえります。だからこそ私は、「この町には高い技術力をもった誇り高いクマソという先祖がいました」と語る事ができるのです。

見たこともない太古の昔の暮らしぶり、モノ作りの美しさや身近にひそむ怖さなどを、勉強だけで語ることは容易ではありません。けれども、その歴史を肌で感じることでできる体験をすることで、今までとは違う想像が膨らみます。それは、あたかもその歴史のその場に私がいたら、このような行動をとったのではないかと、太古の香りがする程に。

今、息子があの時の私と同じ小学5年生となりました。未来に繋がる現代の子ども達にも是非、肌で感じる事が出来るような歴史が香る体験をしてもらいたいと思います。

(浦本真道)



## むすびにかえて

「クマソ復権」が始まった頃、旧免田町には考古学の専門職員がいなかった。森浩一先生は、当初からこの事業を手伝っていた私に、本目遺跡の範囲確認調査を命じた。それは、九州の弥生研究に何の実績もなく、地元にも縁もない私には荷が重すぎた。慌てて熊本県文化課の島津義昭さんに相談したら、「あなたがやればいい」とあっさり言われて、話は決まった。

発掘隊のメンバーは、作業員をお願いした数名の地元の女性達の他は、同志社大学で考古学を学ぶ学生と、考古学の「こ」の字ほどしか知らない私の勤務校の学生である。アカホヤも黒ボクも知らないヨソ者集団を、熊本県文化課や人吉市教育委員会の皆さんは暖かく迎えてくださり、時には一緒に掘ってくださった。森先生から協力を頼まれた八賀晋三大学教授もたびたび訪れ、発掘現場や学生指導、町民との交流にご尽力くださった。

小さな町が町の単費で学術調査をするのは、大変な覚悟だったはず。だから、発掘成果をしっかり町民の皆さんに伝え、発掘調査をしたことも、それを私達に任せたことも、悪くはなかったと思ってもらわねばならない。そのため、発掘現場はいつでも見学歓迎とし、適宜「本目遺跡発掘調査通信」を作って全戸に配布した。現地には説明板を設置した。現地説明会や子ども見学会もおこなった。最初の発掘報告書は、前半を町民向けにイラストや四コマ漫画をいれて易しく解説し、後半を通常の発掘報告書の体裁にした。関西の大学生が長期滞在することも、町では稀有な出来事だった。夜のバーベキューやカラオケ、夏祭り、子供達の勉強相談など、町民との交流も大切にした。学生達は、毎日クタクタだったに違いない。

第3～5次調査は、開発事業に伴う緊急発掘で、熊本県南部で初めての墳丘墓が見つかった。そこを保存し遺跡公園にできたのは、こうした交流で培われた町の皆さんの理解と支援のおかげである。保存問題を協議する町会議員の会議で、「そんなに大事な遺跡を壊しては、土器の町という看板を掲げた免田町の名がすたるでしょう」と用地買収を促してくださったのは、「クマソ復権」に批判的だった議員さんだった。後でお礼に行ったら、「考古学のこととはわからんが、はるばる関西からきて、毎日黒土まみれで発掘しているあなた達が、それほど重要だと言うのだから、わしらが何もせんわけにいかんじゃろ」と笑ってくださった。

2008年、学生として発掘に参加した松田度君から、その翌年が発掘15周年にあたり、お世話になった町に何か恩返しをしたいと告げられた。そこで再結集した元学生達は、今でもあさぎり町のためなら手弁当で集まってくる。町の皆さんが育てた子らが戻ってきたのだ。

2020年の発掘25周年記念事業は、コロナウイルス感染拡大で断念。これを機会に2017年から町に勤める文化財専門職員の秋元めいさんにバトンタッチしようと思った。2021年度には町教委の主催で25周年記念の連続講演会が開催された。そして私達は、この記念誌を区切りとし、今後は秋元さん流の「クマソ復権」をお手伝いする側にまわりたい。新しいステージの始まりである。引き続き、よろしく願いいたします。 (佐古和枝)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	もとめいせきのあゆみ							
書名	本目遺跡のあゆみ							
副書名	本目遺跡発掘調査25周年記念誌							
シリーズ名	あさぎり町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	秋元めい（あさぎり町教育委員会）・石堂和博（鹿児島県南種子町教育委員会）・浦本秀正・浦本真道・河森一浩（京都府宮津市教育委員会）・木崎康弘（八洲開発株式会社）・佐古和枝（関西外国語大学）・前田洋・松田度（奈良県大淀町教育委員会）・松原信之（鹿児島県喜界町教育委員会）・宮崎敬士（熊本県教育委員会） 写真提供：山本栄蔵							
編集機関	あさぎり町教育委員会							
所在地	〒868-0408 熊本県球磨郡あさぎり町免田東1774番地							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
もとめいせき	くまもとけんくまぐんあさぎりちょうおおあざめんだ							
本目遺跡	熊本県球磨郡あさぎり町大字免田字下乙	43514	503-006	32° 12' 35"	130° 51' 38"	1994年3月 ～ 1995年8月	1270.48	学術調査および開発に伴う調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
本目遺跡	墓	弥生時代 古墳時代	墳丘墓、 木棺墓、 地下式板石積石室墓	免田式土器、鉄器 (鉄剣・鉄鏃)、 ガラス玉、破鏡、縄文 土器 ほか		5次にわたり発掘調査を行う。		
要約	<p>免田町（現 あさぎり町）において「クマソ復権」による町おこしが推進されるなか、本目遺跡では、1994年から1995年にかけて、5次にわたる発掘調査が行われた。その結果、弥生時代後期から古墳時代前期までの土壇墓41基・木棺墓16基・墳丘墓1基・壺館1・小土坑11・地下式板石積石室墓2基の他、重弧文長頸壺を含む多数の土器、破鏡1、管玉1、ガラス小玉18、鉄剣1、鉄鏃16が出土。その後、墳丘墓とその周辺地区（第3～5次調査）の保存が決定し、1996年11月に町指定史跡となり、現在に至る。</p> <p>発掘調査時より、本目遺跡に関連する各事業が免田町にて開催され、それらの取組みは2003年に免田町を含む5町村が合併しあさぎり町となった現在までも、佐古和枝氏（関西外国語大学）をはじめ発掘調査団のメンバーで構成される本目遺跡研究会の協力を受け、継続されてきた。本報告書はこれまでの本目遺跡のあゆみと遺跡のもつ価値について、研究者を含む関係者の様々な視点から見つめなおすものである。</p>							

あさぎり町文化財調査報告書 第5集

## 本目遺跡のあゆみ

--本目遺跡発掘調査25周年記念誌--

編集 あさぎり町教育委員会

発行 〒868 - 0408 熊本県球磨郡あさぎり町免田東1774番地

印刷 (株) 協和印刷

〒868 - 0408 熊本県球磨郡あさぎり町免田東1496番地20

発行日 2022 (令和4) 年3月31日



クマソ大王

(イラスト：丸山未来子)